

平成24年度

東邦大学附属東邦中学校

前期入学試験問題

国 語

(100点 45分)

注 意

1. 監督者の「始め」の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題用紙は15ページあります。試験中にページの不足などに気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。
3. 監督者の「始め」の合図のあと、最初に受験番号と氏名を解答用紙のそれぞれの欄に記入しなさい。
4. 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
5. 問題用紙はどのページも切りはなしてはいけません。余白等は適当に利用しなさい。
6. 監督者の「やめ」の合図で筆記用具を置き、所持品はそのままにして、ただちに退室しなさい。
7. 問題用紙は持ち帰りなさい。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

長く延びる軒は日本の伝統的住宅の著しい特徴の一つである。もともとこれは日本に限らず、モンスーン地帯である東南アジアの国々にも共通に見られるものだ。この地域では夏の陽射しが強く、またその前後に雨期があり、雨はしばしば強い風を伴う。長い軒は陽射しを遮るばかりではなく、吹き降りの雨から外壁を保護する。またこの地域の住宅の広い開口部は、夏、通風を第一として開放されているので、**I** 長い軒が無ければ横殴りに降る雨足が室内に届いてしまうし、それを避けて暑いのを我慢しつつ締め切ったにしても、木製建具は雨に強く打たれると水がしみこんでくる。つまり長い軒は自然風土に対応する **(1)** 民衆の知恵であると言えよう。しかしまた、日本の伝統的な住宅の軒には、このような物理的機能だけでは説明しきれない、文化的機能とも言うべきものが備わっている。長い軒はその優しい反りむくりを通じて日本建築の造形美に欠くことのできない要素となつているし、軒下の空間は濡縁や月見台などと組み合わせつつ日本人の情緒を育ててきた。とくに庭に向かって延びる軒の下の、屋内でも屋外でもない曖昧な領域は、自然と人間のおだやかで親密な交流の舞台となつてきた。

(2) このような軒が消えさりつつあるのは、もちろん伝統的な建築様式そのものが使われなくなつてきているからだが、その理由を **II** 突っ込んで考えると、**(3)** 日本人の季節感、とくに夏に対する感覚が変わつてきたからではないかと思う。

さきに述べた軒の物理的機能は、もっぱら夏に対応するためであり、「家の作りやうは、夏を **※1** むねとすべし」という **※2** 『徒然草』の言葉はそのことを端的に示している。しかし、日本の冬もけっこう寒いことは確かなので、吉田兼好さんが右の一節に続けて「冬はいかなる所にも **※3** 住まる」と言つたのは、中学校の国語で習つた時から「ほんとかね？」という気がした。これはその時の教室が、後ろでストーブが細々と燃えてはいるが木枯し

が窓をガタガタ鳴らしつつ隙間風となつて吹き込んでいた、という環境のせいでもあるだろうが、子供の頃の私の感覚では、夏は確かに暑いが、ま、夏休みもあることだし、宿題さえ済ませば、家の北側のトイレの前の廊下など、比較的涼しい場所に寝転がって江戸川乱歩などに読みふけていれば実に楽チンな季節だったのだ。この感覚は大人になつた今でも基本的に変わらない。酷暑に働くのはいやで、事務所は冷房なしには考えられないが、休みでこういう原稿書きがない日には、上半身裸でビールを飲みつつミステリーを読み、時々シャワーをかぶつていれば、いくら暑くても天国なのだ。

現在の日本に軒の長い **①** 典ケイ的な伝統和風住宅が少なくなつたのは、一つには和風と言つてもかつての住宅ほど **②** カイ放的ではなく外回りの壁が増えたので、家全体を軒で包み込んで雨風から守る必要が薄くなつたからであろう。

III 気候風土は変わらなないので、強い風を伴う雨は軒が無かつたり短かすぎたりすると防げない。そういう場合は夏でも窓を閉めなければならぬ不便はあるが、アルミサッシのおかげで建具の水密性は大幅に増したので、昔の木製建具のように雨がしみ入ったり、痛んだりする懸念も薄れた。

そういう考え方にしたが、**(4)** 自身は軒のない住宅に住んでいるし、設計する時もとくに純和風という嗜好の住み手でないかぎり軒を出さない。(もつとも木造住宅で軒が全然無いのは **※4** 雨仕舞いの問題がありがちなので、短い軒、いわゆる「霧よけ」を必ずつける。) 兼好さんの教えに背いて軒の無い家に住んでみると、これはこれなりの良さがある。第一に冬の陽射しが室内に奥深くまで入る。我が家の南側の居間は冬でも晴れた日には暖房が要らないほど暖かく、しかも暖められた床や壁は、陽が傾いてからも熱を放射し続ける。

日本古来の知恵によれば、軒の出は、地域ごとに異なる太陽の高度を考えつつ、夏の陽を遮り、冬の陽を導き入れるように定めるものとされていた。たとえば東京で真南向きに家を建てた場合、太陽の角度は夏至で七八度で冬至で三一度とかなり著しく異なるから、その差を考えて軒の出を決めれば、夏の強い陽射しは遮り、冬には陽光を室内まで届かせる建物をつくることができるわけである。しかしそれは、夏には室内に届かなかつた陽足

が、冬にはようやく縁側に届くという^③テイ度^{テイ}のことに過ぎない。冬を中心に考えれば、軒が短ければ短いほど奥まで陽が入る。まして軒が無ければその効果は絶大なのだ。しかし軒が無いと夏は暑くてたまらないと思われ方もあろうが、これは南に落葉樹を植えることでかなり解消する。我が家の居間の前も落葉樹の林で夏は厚く茂った葉が直射日光を遮って室内に緑の影を落とし、冬はその葉がすっかり落ちて枯れ木立越しに陽射しを送り込む。南側に軒の無い広い窓と落葉樹を組み合わせて配置するのは、一種の^{※5}パッシブ・ソーラー・システム的な考え方も言えるだろう。

この家では夏に横殴りの雨が降ると窓を締めなければならぬが、ま、その時だけ冷房に頼ることにしている、そういうマイナスを考慮しても私は冬の陽射しを採りたい。

しかし、このように他の手段や選択の優先順位の変更によって満たされるのは軒の物理的機能だけである。住まいから軒が消えれば、軒下の空間が持っていた⁽⁵⁾文化的な側面は失われ、そこを舞台として生れた詩歌文学の情緒もしだいに縁遠いものになって行くが、これはいたしかたのない文化の変遷であろう。

(渡辺武信「軒・軒端」)

(注)

- ※1 むねとすべし……中心に考えるべきである。
- ※2 徒然草……鎌倉時代に吉田兼好が著した随筆集。
- ※3 住まる……住むことができる。
- ※4 雨仕舞い……雨水の浸入やもれを防ぐこと。
- ※5 パッシブ・ソーラー・システム……動力などを使わず、自然を有効利用するソーラーシステム。

問1

線①②③と同じ漢字を使うものを次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 典ケイ

- ア ケイ統を立てて研究する。
- イ 外部の組織と連ケイして行動する。
- ウ 味方のケイ勢が不利になる。
- エ 民話をいくつかの類ケイに分ける。

② カイ放

- ア カイ感を覚える。
- イ 試合が再カイされる。
- ウ 事件がカイ決する。
- エ マラソンコースを周カイする。

③ テイ度

- ア 修学旅行の日テイを組む。
- イ 身分証明書をテイ示する。
- ウ 商品のテイ価を調べる。
- エ 学説を根テイからくつがえす。

問2

I III にあてはまる言葉としてもっとも適切なものを次のア～クの中から一つずつ選

び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア もし
- イ じつに
- ウ さらに
- エ まるで
- オ かならず
- カ かえって
- キ きわめて
- ク もちろん

問3 ——線(1)「民衆の知恵であると言えよう」の説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 高温多湿の自然風土に適応した日本の伝統的住宅の長い軒は、日本人だからこそ考え出すことのできた建築様式であると言えよう。
- イ 日本の伝統住宅の特徴の一つである長い軒は、高温多湿の自然風土の中で暮らす人々の努力が結実した建築様式であると言えよう。
- ウ 強い陽射しと激しい風雨を防ぐ長い軒は、高温多湿の夏を快適に過ごすために人々が生み出した優れた建築様式であると言えよう。
- エ 高温多湿の夏に適応した日本住宅の長い軒は、自然との調和を大切にしてきた人々が考案した画期的な建築様式であると言えよう。

問4 ——線(2)「このような軒」の説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本の自然風土に適応しつつ、日本人の感性ともうまく調和してきた伝統的な住宅の特徴である長い軒。
- イ すぐれた物理的機能だけでなく、文化的機能までそなえた日本の伝統的な住宅に見られる長く延びた軒。
- ウ 物理的かつ文化的機能を持ちながらも、日本人の感覚の変化で消え去りつつある伝統的な住宅の長い軒。
- エ 日本建築の造形美を演出し、しかも自然と人間の交流をも可能にしてきた伝統的な住宅の長く延びた軒。

問5 ——線(3)「日本人の季節感」とありますが、日本の季節に対する筆者の考えとしてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 夏の暑さはたえがたいものではなく、過ごし方次第でどのようなことができる。
- イ 夏が暑くて過ごしにくいというのは昔の人々の感じ方で、本当はもっとも快適な季節である。
- ウ 冬はかつて夏よりは過ごしやすかったが、今では夏も冷房により快適に過ごすことができる。
- エ 冬の厳しい寒さを乗りこえるためには、夏は多少暑かったとしてもがまんをするべきである。

問6 ——線(4)「私自身は軒のない住宅に住んでいる」とありますが、それはなぜですか。その理由としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア どのように軒の出を調節してもその効果は高が知れているが、軒のない窓と落葉樹の組み合わせで夏冬ともにより過ごしやすくなるから。
- イ 長い軒は季節感の変化した現代人の住宅には無用の長物であり、しかも自然保護の面からも暖房の必要のない家のほうが優れているから。
- ウ 建築様式の変化で短い軒でも強い風雨に対応できるようになったためと、夏の強い陽射しより冬の暖かい陽射しのほうを好んでいるから。
- エ 夏の暑さや激しい風雨を防ぐ点で軒のある家にはかなわないが、冬には陽射しが室内奥深くまで入るので暖かく過ごすことができるから。

問7 ——線(5)「文化的な側面」について具体的に述べた部分を本文中から十五字以内でぬき出して答えなさい。(句読点、記号等も字数に数えます。)

- 問8 日本の建築について筆者はどのような立場で自分の考えを述べていますか。もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 日本の伝統的住宅は人々の知恵が積み重なってできたものであり、その良さを守りながら現代生活に適應する住宅の構造へ改良していくべきであるという立場。
- イ 日本の伝統的住宅は夏の生活に適應したものでしかないので、これからは年間を通して日本の自然風土に適應する住宅の構造を考えるべきであるという立場。
- ウ 日本の伝統的住宅は過去の自然觀をもとに生み出されたものなので、自然環境が變化した現代には新しい考え方に根ざした住宅の構造が必要であるという立場。
- エ 日本の伝統的住宅は日本人の生活や感性にうまく適應したものであるが、日本人の生活様式が變化すれば住宅の構造も變化していくのが当然であるという立場。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

運動会の前夜になって、加奈子は急に「おとうさんもおかあさんも、明日来なくていいよ」と言いだした。両親が仕事や用事で見に来られない一年生といっしょにお弁当を食べなければいけないのだという。

「あとさあ、徒競走、サイターの組み合わせで、みんな足速いのよ。もうぜったいビリ決定だから、あんまり見られたくないっていうか、はずかしいじゃん、だから、ね、もういいじゃん、お弁当いっしょに食べられないんだったら来ても意味ないし、カッコ悪いところ見せたくないし。来年に期待してよ、ね」

テンポよく言う加奈子の言葉に、雄介はつい「わかった」と答えてしまったが、運動会を楽しみにしていた和美は不満そうに「(1)一年生の子と食べるのって、カナちゃん一人だけなの？」ときいた。

「二学期のクラス委員の子は、いちおうみんな先生に声をかけられたみたい。みんなは断ったんだけど、まあ、一年生の子もさびしいじゃん、やっぱ」

「でもねえ……」

納得しきれない顔でうなずいた和美は、「あ、そうか」と声をはずませて加奈子に向き直った。「ねえ、それ、生徒会の選挙のテストなんじゃない？」

「はあ？」

「だって、一年生の面倒も見られないようじゃ生徒会なんてできないじゃない。運動会終わったら、すぐ選挙でしょ、先生はそうやって向き不向きをテストしてるのよ。どう？ その可能性あるんじゃない？」

ミステリードラマの名探偵みたいに得意げに、勢いこんで言う。

だが、加奈子は「ないよ、そんなのぜんぜん」とそっけなく返した。

「だって、保護者会のおきも原先生言ってたわよ、カナにすぐ期待してるって、立候補すればぜったい当選するっ

て」

「そんなの関係ないよ、せんせーが勝手に言ってるだけじゃん」

「女子の生徒会長って、創立以来初めてなんだってね」

「知らないってば！」

(2) 不意に、声^{こゑ}がとがった。雄介^{おとすけ}が驚いて顔を上げる間もなく、加奈子は「あたし、立候補なんかしないもんと声をさらに強めて席を立ち、そのままリビングを出ていった。

「とにかく、明日は来なくていいからね」
リビングのドアを閉める音と同時に、言った。「来なくていい」のではなく「来ないで」と封^{ふう}じるような響^{ひび}きだった。

雄介と和美はそれぞれ、きょとんとした顔を一瞬^{いつしゆん}ゆがめ、タイミングを合わせたように苦笑いを浮かべた。

「まあ、ね、難しいよねえ」と和美が言った。

「中学生だからなあ」と雄介は返す。

いつもの、かたちだけの決まり文句^aだった。

(3) 沈黙^{ちんもく}が重さにならないうちに、雄介は「風呂、入ろうかな」、和美は「明日のごはんといどかないと」、どうでもいいことをどうでもいい口調でひとりごちて、その夜の一家だんらんの時間は終わった。

加奈子は秋晴れの陽射しを浴びるグラウンドの真ん中で立ちつくしていた。ダンスの輪から、一人だけ、はじき出されていた。

「ちよっと、やだ……」

和美はうめき声で言って、かたわらの雄介の袖^{そで}をつかんだ。

「振り付け、ど忘れしたのかなあ」と笑う雄介の声も裏返りそうになった。

激^{おどろ}しいリズムとうねるようなメロディーの音楽に乗って、加奈子以外はみな、手をつないだり脚^{あし}を上げたり、しゃがんだり跳^とんだり、走ったり止まったりと、流れるように踊^{おど}っている。加奈子は泣きだしそうな顔できよろきよろと左右を見まわし、肩^{かた}をすぼめ、あごをひいて、その場で小さく跳^はねる。無意味に、けれどそれしかできないのだというふうに一所懸命^{けんめい}跳ねる。

雄介は呆然^{ぼうぜん}と加奈子を見つめた。目をそらしたかった。自分より、むしろ加奈子のために。だが、(4) まなざしはグラウンドに吸い寄せられたまま、どうしても動かない。

「ねえ……なんなの？ これ、どういうことなの？」

和美の声が波うつ。雄介はなにも答えられない。のどがすぼまって、ひどく息苦しかった。

「ど忘れなんかじゃないわよ、ぜんぜん踊れないじゃない、おかしいって、ぜったいおかしいと思わない？」
袖を強く揺^ゆさぶられた。

「あの子……だからあんなこと言ったのよ、ゆうべ。変だと思ってたのよ、なにかあると思ってたのよ……」
(5) 考えすぎだ。雄介はまた笑おうとしたが、今度は、ほおはこわばったまま動かなかった。

加奈子の話を疑っていたわけではない。軽い気持ちでグラウンドに来た。運動会の代わりにデパートに出かけることにしていた。学校が通り道にあるので、プログラムで確認して、せっかくだから創作ダンスだけ見ていうということになった。「約束破るとカナに怒られるかもな」と、(6) ちよっとしたイタズラをしかけるような気持ちで観客席の最後列に座ったのだった。

加奈子は飛び跳ねるのをやめた。まわりが静かな踊りになったからだ。となりの子がゆっくりと腕^{うで}を動かすと、ワテンポ遅^{おそ}れて、加奈子もおそおそとそれをまねる。

セツちゃんと同じだった。こっけいで、ぶざまで、かなしい姿が、何日か前に加奈子が話していたセツちゃん
の姿に重なってしまう。

「なあ、セツちゃんって子、どこなんだ？」

雄介は和美を振り向いてきいたが、和美はうわずった声で「さあ……」と返すだけだった。

エンディングにさしかかった。全員が一点に向かってダッシュして、円形のスクラムを組む。加奈子はみんなから遅れてスクラムに合流したが、どこにも入れない。一人だけスクラムの外から、かたちだけみんなと同じように中腰ちゆうこしになって、だれにもつながらない両手を広げた。

音楽が止まり、スピーカーから「プログラム九番、二年生女子の創作ダンスが終わりました」と女子生徒の声が響きわたる。

雄介は和美の手をひっぱって観客席から離れた。加奈子の顔を見たくない。両親がいることに気づいた瞬間の顔を、見たくなかった。学校の外に停めた車に向かって、立ち止まることなく足早に歩いた。(2) 和美は何度も後ろを振り返っていたが、そのたびに手を強くひいた。

(重松清「セツちゃん」より。出題にあたり、原文の表記を一部改めました。)

問1 本文を場面の upper から大きく二つに分けると、前半はどこまでですか。前半の終わりの五字をぬき出して答えなさい。(句読点、記号等も字数に数えます。)

問2 〳〳〳線 a 「決まり文句」、b 「おずおずと」は、どのような意味ですか。もつとも適切なものを次のア、イの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-------|---|------------|---|---------------|
| a | 決まり文句 | ア | しめくりで言う言葉 | イ | 何度でも繰り返して言う言葉 |
| | | ウ | まとめとして言う言葉 | エ | 型にはまったいつも言う言葉 |
| b | おずおずと | ア | 本当にこまった様子で | イ | こわがりためらった様子で |
| | | ウ | 悲しみしずんだ様子で | エ | あせり落ち着かない様子で |

問3 〳〳〳線(1)「一年生の子と食べるのって、カナちゃん一人だけなの？」とありますが、この質問にこめられた和美の気持ちとしてもつとも適切なものを次のア、イの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 加奈子だけではなくもつともほかにも協力する生徒がいても良いのではないかと期待をよせる気持ち。
イ 二年生が多くいるにもかかわらず加奈子だけに一年生の面倒を見させる学校に不信をいだく気持ち。
ウ 楽しみにしていた運動会なのに加奈子といっしょにお弁当を食べられないことを残念に思う気持ち。
エ 両親を運動会に來させないようにするために話をつくり話をしていないかと疑問に思う気持ち。

問4 〳〳〳線(2)「不意に、声があがった」とありますが、この時の加奈子の気持ちとしてもつとも適切なものを次のア、イの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の気持ちを理解せずに母親が一人で勝手に想像をふくらませていることに対するいらだち。
イ 自分の希望も聞かれないままに先生と母親が自分の未来を決めてしまっていることに対する不満。
ウ ほのめかしているのに運動が苦手な自分の気持ちを理解することのできない母親に対する反感。
エ そばで見ているだけで探偵気取りの母親の言葉を制止しようとしてもしない父親に対するあてつけ。

- 問5 ——線(3)「沈黙が重さにならないうちに」とはどのようなことを意味していますか。もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 加奈子のわがままが許せずいかりがこみあげる前に。
 - イ 加奈子にかける言葉が見つからず仲が悪くなる前に。
 - ウ 言葉の真意がわからずたがいの顔をうかがう前に。
 - エ 雄介と和美の会話が続き気まずい状態になる前に。

- 問6 ——線(4)「まなざしはグラウンドに吸い寄せられたまま、どうしても動かない」とありますが、この時の雄介の気持ちとしてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 加奈子が多くの子供からいじめを受けることになった原因をつきとめねばならない。
 - イ 自分の目の前で一体何が起きているのかがわからないため気がかりで仕方がない。
 - ウ 子どもがづらい状況に置かれているという現実から目をそらさないようにしている。
 - エ わが子の身の上で起きている現実を自分自身の心の痛みとしてきざみこんでいる。

- 問7 ——線(5)「考えすぎだ」とありますが、何をどのように考えることが「考えすぎ」なのですか。もつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 一人だけ二年生の踊りの輪に入れない状態になっていることを両親に知られたくなかったので、加奈子が「運動会に来なくていい」と言ったと考えること。
 - イ 学校でみんなにいじめられているために一年生とすすことになったことを言えなかったので、加奈子が「一年生と弁当を食べる」と言ったと考えること。
 - ウ 運動会で一人だけうまく踊れていないのは二年生の女子に加奈子がきらわれているためであり、本当のことを両親とも知らされていなかったと考えること。
 - エ 徒競走だけでなく踊りもみんなが先に上達していて加奈子一人が輪の中に入れない状態であり、そのことを加奈子が「はずかしい」と言ったと考えること。

- 問8 ——線(6)「ちょっととしたイタズラをしかけるような気持ち」の説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 加奈子が運動会で一年生のためにがんばっている様子を見ておきたいという気持ち。
 - イ 加奈子に見つかってしまって約束を破ったとおこられてもしかたないという気持ち。
 - ウ 加奈子が家に帰ってきたら実は見に行っていたことを教えて驚かそうという気持ち。
 - エ 加奈子に悪いとは思いますがもこつそりと運動会を見に行つてやろうという気持ち。

問9

——線(7)「和美は何度も後ろを振り返っていたが、そのたびに手を強くひいた」とありますが、この時の二人の気持ちの説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 加奈子の泣き顔をもう見たくないと考え、雄介に対して母親として担任の先生に事実の確認をしたい和美。
- イ 運動会に参加したことを後悔している雄介に対して加奈子に何が起きたのかということを確認したい和美。
- ウ 停めておいた車に乗って一刻も早く家に帰りたい雄介に対して加奈子に見つかっても見守り続けたい和美。
- エ 加奈子に見つかる前にこの場から逃げたいと思う雄介に対して加奈子のこと心配で会場に戻りたい和美。

問10

本文の説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 加奈子の「明日来なくていいよ」という言葉をきっかけとして、それまでは温かいきずなで結ばれていた家族の心が次第にはなればなれになっていく状況を、加奈子の視点からうきほりにしている。
- イ 運動会で加奈子にふりかかったつらい出来事を、加奈子にとってはもっとも身近な存在である和美の視点からえがきだすことで、思春期の子を持った親の気持ちを読み手に想像させやすくしている。
- ウ 第三者の視点から登場人物の言葉や行動をいきいきとえがきながら、ときに雄介の視点によりそってその心の動きをえがきだすことによって、読み手がその場にいるような臨場感を生み出している。
- エ はじめは加奈子の気持ちを尊重して、本音の部分に気づかないふりをしていた雄介と和美の心が運動会の創作ダンスをまのあたりにして大きくゆれ動いていく姿を、第三者の視点からえがいている。

一

二

問 1

①

②

③

問 2

I

II

III

問 3

問 4

問 5

問 6

問 8

問 7

問 1

問 2

a

b

問 3

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8

問 9

問 10

受験番号

氏 名

総 得 点

一 の 得 点

二 の 得 点

--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--

二 の 得 点

一 の 得 点

総 得 点